

その箸は人によって違おうわけで

澤好摩／高柳路子（歌人）／山田耕司

山田 「円錐」から新鋭作品の募集を行つたところ、およそ半年の期間に四十七作品の応募がありました。三十五句という少なからぬ作品を対象にしたにもかかわらずたくさんの方が応募してくださったことに感謝申し上げます。

今日は選考会。この段階で、どの作品も作者のいかなる情報も作品に付してありません。すべての作品にコメントしたいところではありますが、時間の都合上、それぞれの方から上位作品を五つ推薦していただき、そこから話を始めたいと思います。

37	22	11	10	8	
ルミにまつわる幾つかの時間	はやく帰りたい	総国	からうじて	エビアンの山	山田耕司 推薦

17	22	47	19	27	
見えない川	S H A D D A N	螺旋から	チャウチャウ	プレイステーションの起動音	高柳路子 推薦

23	22	15	10	6	
釣合はぬ	はやく帰りたい	目線は高く	からうじて	隙間風	澤好摩 推薦

山田 ではそれぞれの特選を対象に話をしていたらきましよう。

澤 15番の「目線は高く」を特選にしました。そつなくそこそこにまとめてある作品が多いんですけど、中でも

帯締めて目線は高く風薫る
青柿の落つるや遠く水の事故
見納めの制服姿山笑ふ

この辺がわりとそつなく書けていて、とくに「目線は高く」の句はいいと思うね。「風薫る」が甘いといえれば甘いんだけど。それから「青柿の落つ」ということと「水の事故」との対比も面白いし。大失敗の句がないんだよね。まるきし「箸にも棒にもかからない駄作」というのがあまりないんだよね。評価する句が、全作品中最も多かったのがこの「目線は高く」でしたね。二十一句も印が付いたね。山田〈帯締めて目線は高く風薫る〉この句は上五中七下五それぞれに述語が入っております。澤さんがいいというのはどういふ点においてでしょう。

澤 そこが問題なんだけどね。

山田 では「平均的に良い」ということですか。

澤 本当だったら「帯締めて目線は高し」とここで切ったほうがいいかもしれないね、俳句的には。

高柳〈帯締めて目線は高く風薫る〉ってどういふ句なんでしょう。

澤 実際いかほど目線が高くなった

そういう視点において、一番多くの句を評価した作品が「総国」でした。うまいんですよね。ちよつと嫌われるかもしれないタイプのもあります。

幾山河透かして蟬の羽乾く

ここに「作為」を見出して嫌う人もいます。しかし、「蟬の羽」が乾く行為をその単位時間だけであらわすのではなくて、累々とした営みに広げる、その手さばきとしての「幾山河」は狙い通りに機能していると思います。

あさがほのたゝみ皺はも潦

些細なことの立体交差のような視点と、「はも」の余韻の含め方などは、いかにも手練れな感じですよ。

手庇の手がよく見えて葱畑

これも、計算が効いている。作者の感性を選考するのではなく、言葉の使い手としての自己抑制の方を見させていたのだと思います。その点で、この「総国」を評価しました。

作品全体の借景としては、「貴種流離」的な含みがあるだろうと思います。『伊勢物語』的な、あれですね。古典作品への水脈を示しつつ、自己の本体を包み隠すアリのバイのような主体のあり方が仕込

わけではないんだらうけれど、帯を締め「目線が高」くなったような気分がしたということなんだらうね。気持ちいいシャンとしたということですね。

高柳 ふうむ。

澤 山田くんが言ったように表現上の瑕疵は見られないわけじゃないんだけど、他のがね、あまりにもなつちやないない句が多すぎてね。

山田 そうですか？

澤 そうでもないですか？

山田 そうでもないです。

澤 もうひとつ。第二位にした「からうじて」について。特に「イーゼルに絵はなく風に色はなく」がうまいと思うね。高柳 どんなところがですか？

澤 これは無い無い尽くしなんだけど、「イーゼル」(画架)という本来は絵があるべきところに絵がない、で「風に色はなく」ですが、これは秋の季語で、この二つを上手く配合させてね、何も言っていないのだけれど無い無い尽くしをうまくまとめているなと思いました。

高柳 ううむ。

澤 ただ、「風はなく」という連用形での止め方よりは「風はなし」のほうが

まれていますね。境界的なことから離れようという意図をそこに感じました。

澤 私も「潦」「葱畑」採ってますね。

山田 もうひとつ。「エビアンの山」とも軽い。

高柳 え？これは軽いですか？

山田 そうです。俳句の手筋である二物を一句において出会わせるような句が散見され、そこに新しさを妨げる何かがあることはあります。

涼しさや交互に覗く顕微鏡

パン屑のそれぞれに影鳥渡る

電卓の0は四角く文化の日

こうした句における季語の扱いも新鮮味に欠けるといふ指摘があるかもしれませんが。それでも、季節を表す情報としての季語というよりは、散文的に説明しえない気分をあらわすための抛り所としての季語の姿がそこにある。そのセンスの素直な表出に好感を覚えました。

澤 〈問一をいつたん飛ばす蟬時雨〉

山田耕司の句でこういう趣向のがあったのを思い出しました。

山田〈遠雷や問五の解は二位の尼〉ですね。落子さんには、こういう句は重いですか？

良かったかもしれないですけど。高柳 では、そういう傷があっても、この取り合わせがとても良かったということですか？

澤 徹底的に傷をつついていたら消えちゃうんだよ、どの句も。

いかに自分の作品群をシabarるか

山田 ふだんの作品とすこし違うシバリをかけているだろう作品に注目しました。もちろん、普段どのような作品を書いているのかは、作者名が知らされていないこの段階ではわからないですけれど。シバリとは、つまり三十五句を貫いている設定なり言葉の用い方なりのことで、そういう規制を設けるといふことは、自分自身の日常を素材とするだけでは成し得ないところでもあろうかと思つわけです。それを「作為」というかもしれません。感じさせようとする「無為」よりも言葉として書かれている「作為」のほうが私には親しいものと思うところがあります。

20の「SHADDAN」とか、これも面白かった。加藤郁平のシバリですね。しかし、すでに見たシバリだともいえます。

高柳 重い軽いでなく、着地点がわかりやすいだけのよう。季節感新しい感じがしますが、全体として地味だし、やっぱり「どうせやるならもつとやれ」という感じがしますね。

澤 あはは。

高柳 安全域にいる。何人かで世間話をしていて、その中で若い人が表現しても許される範囲で受け答えをしている、そんな感じがします。

山田 なるほど。保険、ですね。

高柳 そう、です。

山田 新鋭作品とは「保険なんて要らない」という姿勢に基づくことすれば、全く別の視点から句を見ることになりました。落子さんの選考の視点ですね。

生きながら死んでいるという感覚

高柳 「プレイステーションの起動音」ね。この人のいいところは、「死生観」が現代の人に近いところですね。そういう感じがします。戦争など、目に見える死が身近にあるような時代の死生観を現在の人は持ち得ない。今は平和で自由で豊かなんだけど、自由の中に目に見える抑制がたくさんあって生きています。

が得にくい。全体は豊かでも個々人は豊かではない。平和なんだけどどこか生きてても死んでるような状態」を強いられる日常から、いつも心身が脅かされている。そういう日常に即した死生観は、かつてのそれと違うでしょう。新しい死生観に立脚してると感じました、この「プレイステーションの起動音」は。

たとえば

三寒四温除霊されちゃったパン

この句はずい。

山田 あ、これ。私も面白くも思ってた。採りました。

高柳 パンって出来上がるまでにあつためたり冷やしたりしますよね。その過程で除霊されちゃって、だからこそあんなにふんわり穏やかになっている。安全で無害で。こういう句って今まであんまり見かけなかったように思えますよ。毒なら毒っぽく書いちゃうし、毒を抜かれたら抜かれたと嘆いちゃう。マルかバツか両極端だった。ところがこの句は、除霊されながら、うれしくはなさそうだけれど、その状態にもそれなり価値を認めている。そういうところが、一歩新しい、

そう思います。

澤 私の感覚でいうと「三寒四温」をそういうふうを読むことはありえないね。全然、季語として機能してないでしょ。

高柳 知らない、そんなの(笑)。季語

について確認しますが、この句において

の「三寒四温」は季節感を表すためのものでは

ないかもしれない。だけど、そ

うじゃなきゃならないわけじゃないで

しょ。季節感を感じさせる季語を入れな

きゃいけないのが俳句だというのなら仕

方がないけど。

澤 いや、そんなことはないけれど。

山田 私はあえて季語として読むからこそ面白いと思いました。寒さや温かさが反復されていく、そうして季節が変化のドラマを示す一方で、無機化されて、されすぎちゃった物体が置かれている。

高柳 季語だって時代とともに季節感が

変化していくわけだから、いろいろ変

わっていても不思議はないはず。今の

現実の中の新たな意味をもたせた上で

使っただけなければ、常套化しちゃって

季語が死んじゃう。だから新しい使われ

方をして、新しい命を吹き込む必要があ

るんじゃないかと。

澤 いや、新しい意味を吹き込むというの

のはよくわかるんだけど、私が思うの

は、三寒四温というのをパンがあつため

られたり冷やされたりということの喩で

使われているのだとしたら、全くそれは

季語ではないということ。

山田 作者が喩として使ったかどうかは

別に考えるべきでしょう。むしろ「三

寒四温」の後にキレがあるという方が俳

句的なんじゃないでしょうか。

澤 勿論です。「除霊されちゃったパ

ン」というものの上に「三寒四温」があ

つて、その二つの間に何らかの意味が婉

曲的に出てくるといふのなら問題ない

けれど、最初から「除霊されちゃったパ

ン」の説明として前提されたものとして

「三寒四温」がきちやうとまずいなと思

います。

山田 むしろ、現代的な句では、季語は

季語として流通していて、それを喩とし

てあれ何であれ回路を成立させないよ

うにして何かを述べるといふようなキ

レ、ブツチリとしたキレ、というものを

想定して読むべきじゃないでしょうか。

そして、そのキレっぷりの面白さを楽

んでいるフシがあるのではないでしょ

う

大晦日と言ったら煩惱が百八つとされて

いるわけですが、一方で、ネットの世界

において悪があるからパスワードは増

えちゃう。すごい桁違い。数値化された

悪という点で大晦日とパスワードがつ

ながり、うまい取り合わせだと思います。

山田 締めくり感がつないでますね。

高柳 そう。ちょうどそこでパスワード

を数えたら10桁超えましたって。この

句は比較的オチが明確ですが、こういう

ことをここの言葉で言ったのは手柄だ

と思います。この人の句の全部がわか

ったわけじゃなくて、ちょっと無理の

ある部分もあるかもしれない。それ

でも全体として新しい感覚で、自

前の感性で言葉に新しいものを表

現させようとしていて、それをある

程度成功させる力があると思

いました。だからイチオシです。

山田 この方の作品を見て思ったん

です。四畳半の部屋には、一畳分の

畳を四枚と半畳の畳を持ってきて敷

くという感覚が定型詩の誘惑としてあ

つて、それがいかに見事に収まった

か、言葉がサマになつてくるかとい

うところが評価されてきたところもあ

ると思うんです。ところが、この方

は、どこかで畳が

か。だから、本来の季語として機能して

いるからこそ、むしろ句の中の奇妙な

フランスのようなものが見えてくる

ということがあるんだと思います。

澤 私は季語派でも何でもありません

けど。

高柳 みなさんは季語を使うために俳

句を書いてるんですか？ 短歌では歌

語という歴史的に詠み重ねられている

んなイメージを帯びた語があるわけ

ですけど、季語もそれに似たもので、

積もったイメージを生かしながら使

うものだと思っ

ていました。どうなんでしょう。その

語がそこに使われる理由が「季語

だから」では言い訳に聞こえます。

新しい内容や文脈の中でその季語のも

つ力が必要とされて、たとえこの

語が季語じゃなくてもここに使

った、と言えるぐらいの必然を

作り出すことが、季語を生かすこ

となんじやないかなって思います。

澤 「三寒四温」というのが「除

霊されちゃったパン」というのを

直接的に説明するのはなくて、「除

霊されちゃったパン」に対するある

気分を表すものとして季語が配

されているというのならそれでいい

んじゃないかと思うわけです。

収まらないことを狙っているような気配がある。〈事故眺めてる父と子と父野分〉この句のひとつ余剰に感じる「父」なんか、そうした余剰の志向がでてきちゃって、「野分」も季語としての適合性を四畳半に四畳半を収めるよりは、あぶれてるところをねらっているようにさえ見える。その収まり切らなさがかもしだす謎のようなものが欲しかったのかも。〈あごのせるところにあごをのせる春〉これなんかは句の内容もそうだけれど言葉として収まる場所に収まるものが収まっている。収まらない感覚を貫いていたら、その方が面白かったのかもしれませんね。

高柳 「父と子と父」って語列の意味がよくわかんなかったんですよ。

山田 「父と子」だけだったら相対的な二者関係ですけど「父と子と父」となると社会的な属性の列記であって、そうした形の家族的な密なるものの解体を期待したのかもとは思いましたが。

高柳 「父と子」とくれば「聖霊」とかが続きそうですが。

山田 それも、収まりというものかもしれない。その先入観を踏まえた上での収まり。

りのつかなさの方向に行こうとしているみたい。

高柳 さっきの「あごのせる」の句は眼科検診ですよ。春といえば新しい季節への期待を抱きたいのに、所定の場所にあごをのせてる。この句は想像の滞空時間が短い。謎って言葉は批評に使いたくないけど、謎が解けたらいきなりチャンチャンって済んじゃうともの足りない。

「箸にも棒にも」をめぐって

山田 「からうじて」について話をしましょう。澤さんと私が共通して推薦しています。澤さんは第二位にしていますね。

澤 さきほどの「目線は高く」は平均的にそつなく書けているんだけど、良さと同時に難点もある。こちらの方は、出来不出来の差があるんだけど、句を単独で取り出してみるとこっちの方が面白いのかなあ。

イーゼルに絵はなく風に色はなくからうじて人界にあり大西日

「大西日」の「大」がちよつとおおげさだけ。ところどころに面白い句があるんだよね。〈生も死も天の手違ひ春満月〉これなんかはつまらない句だと思っ

んだけど。

高柳 〈からうじて人界にあり大西日〉は面白くて、〈生も死も天の手違ひ春満月〉はつまらない。むずかしいですね。勉強になります。

澤 べつに「大西日」なんて「人界」にないんだけどさ。だけどそれを「からうじて人界にあり」と捉えたところに面白さがあるわけ。

山田 先ほど出てきた「保険」という批評の言葉を使わせていただければ、まず保険枠内の句が揃っているなあと思います。

澤 「保険」をマイナスのイメージで捉えているけれど、やっぱり、読んでね、高柳さんがあげたような句は不安なんだよね。本人がどこまでわかっているんだらうと。

山田 澤好摩を不安に陥れる作品だったんですね。

澤 箸にも棒にも引つかからないような句があるような気がしてね。

山田 澤さんにしてみればそうかもしれないけど、みんなが澤さんの箸とか棒とかに引つかかるような句を書いていたから、つまらなくなると思いますが。

澤 いやそれでも、箸にも棒にも引つかからないような句とね、それでもない句が混ざっていると、疑心暗鬼になっちゃうんだよね。

高柳 その箸は人によつて違うわけですから。

山田 そりゃそうだ。

澤 だから、私の箸には引つかからないって言うてるんだよ。

山田 たとえば句会なんかだと、個人で面白いなと思つても、その句を説明しなければと思うと、むやみに選句が保守的になっちゃう。その人の説明できる範囲の句しかとれなくなっちゃうということがあるように思います。短歌はどうですか？

高柳 短歌の世界でもそういう面はあるかもです。私は自分の箸を使い、なおかつ説明できそうもないことをなんとか説明しちゃうので、やむを得ず保守的になるということはないはず。

山田 保守的な傾きにおいては、保険がきいている・安全・平均なんてところを面白さと言っちゃうことがありますね。

曖昧さとの距離

山田 「はやく帰りたい」はどうなんですか？

高柳 私はいつたん推薦枠にあげて、消したんですけれど。

山田 どんなどころが気になりました？高柳 いいと思ったのは、この人の場合にはものごとを裏返しにするような変わった捉え方をする句がいくつかあったことですね。そこを採ったんです。

一粒つつ雨に日当たるソーダ水

たとえばこれは句が砂時計みたいなんです。「日当たる」って部分はイマイチだなあって思うんですけど、ただ、ソーダ水のあの粒が水の中の空気、で、雨は空気の中の水の粒というわけで、裏返し感覚の捉え方が面白い。でも全体的には力不足かと。

澤 私が面白いと思ったのは

鳥の巣に鳥をらぬ日はじまりぬ

鳥の巣立ちと言つてしまえばおしまいなんだけど、鳥の巣立ちを「鳥をらぬ日はじまりぬ」と捉えたところが面白いと思つたんだよね。

高柳 さっきの「イーゼルに絵はなく風に色はなく」もそうですけど、「いな、」がお好きですよ。あるべきものがな

いつて話をすると澤さんにウケる(笑)。
澤 そんなことはないよ。
山田 〈春闈けてピアノの前に椅子がない澤好摩〉ですね。
高柳 こういう句って、ありがちでは。
澤 いや、なかなか無いよ、効果的に働いている句という意味では。

山田 そうですか。
澤 「鳥の巣に鳥をらぬ」とかね、「日はじまりぬ」とかね、そういうのはたくさんあるけど、うまくそういうところをすりぬけてこういう風に書いたのは手柄だと思っね。巣立ちって書いてやえやおしまいなんだよ、こんなの。

高柳 鳥というよりは、鳥の巣が主人公の視点なんです。

澤 そうなんだよ。

山田 私も「はやく帰りたい」を推薦作品としていただきました。俳句を書くことの動機のひとつに「典型性」へのあこがれというのがあつたような気がするんですけど、そういう気配が濃く出ている句群だと思つてます。結局その磁場から抜け出せないというのが見て取れます。

くりかへすあやまちに似て曼珠沙華この句には、雛型とでも呼ぶべきものが

あります。

澤 うん、あるな。

山田 この方は、見方を変えれば、典型性から脱出しようとしているのではなくて、むしろ、典型性をもてあそばさうとしているだけなのかもしれない。それは、俳句の「やや外側」の立ち位置からの営みでもあるうし、俳句とはそうしたもてあそびの対象であり続けてきたのではないかとと思っただけですね。

澤 もてあそび方では「九年母や汽車を見送るやうにして」の「九年母」なんて、それだね。

山田 なるほど。

「しあはせをおぼえてゐたり蛇出づる」と捉えることができる文脈を「蛇」と俳句には季語というものが入るんですよ」といって「やや外側」からのぎこちない季語の扱い方をふまれば、「蛇穴に入る」は固定された情報であって、他の文脈と交差しない。むしろ、「しあはせをおぼえ」ているのは、蛇ではなく、作者自身である可能性がより浮上してくる。そうしたスキマの作り方を確信をもって遊んでいるんですね。

澤 そこは「ぬたり」でキレているからそう読める。「ぬたる」では、山田は採らないわけだね。

山田 そういうことです。言っている内容は、どうということもない。だけど、なにがしか重たいことを言うから句に価値が生まれるわけでは無いでしょう。

高柳 「しあはせをおぼえ」ているのは、この世界だと思っただけです。だから蛇がまた出てくるんじゃないかって。

山田 なるほど。やはり主語が曖昧なんです、ここ。この句はそこに寄りかかっている。意味を追う世界では、そうした曖昧さは排除される。でも俳句はそういう曖昧さをこそ遊ぶものなのじゃないのかと思うところがあります。思わせぶりな形にしてしまう分、こういう席だと突破力に欠けると評価されがちですが。

面白くなる前に終わっちゃう

山田 澤さんと高柳さんの間で推薦作品の重なりは無いんですね。

高柳 違う箸でつまんでいるから。

山田 それはすばらしい。うれしい。さて澤さんは「釣合はぬ」を採っていらっしやいますね。私はそれを、澤さんにし

てはちよつと珍しいことだと思っただけです。

澤 そうですかね。

水温む堰がることの気安きにこれは「気安き」となっているけど、「気安さ」なんじゃないか。その上で、まさにその通りだなあと思う。

椋鳥さには祖父は英霊にはあらず

この句の「椋鳥さには」というのはうまいと思っただね。こういう句を選んでいくけれど、読んでるとちよつとイライラするな、全体的に。

山田 何がイライラするポイントですか？

澤 なんでこういうふう言い終えちゃうんだろかな、と。なんだか面白くなりそうなどころの手前で終わっちゃう感じがやたら多いような気がするんだよね。〈糊代を半夏の味と覚えけり〉これじゃどうしようもないでしょ。なんで「味と覚えけり」って決めちゃうんだろ。〈行水に婉みなほさるる心地かも〉「心地かも」なんて要らんんじゃないか。高柳 でも、採るってことは、気に入ったところがある。

澤 そりゃそうなんだけど。へうす

らひを来るは人といふよりも〉これなんかも何か言いかけてはいるんだけど。言いかけてるだけだよな。

山田 澤さんは「隙間風」も採っていらっしやいますね。澤さんからコメントいただく前に、私が澤さんが選んだと思しき句をあげてみましょうか。〈靴紐を結ぶ炎帝に平伏して〉

澤 採ってない。

霏やゴール運ぶに総出して

私が採ったのは、これ。

高柳 つちふる。難しい字のやつだ。この句はどういう風にいんですか？

澤 霏（つちふる）、というのは黄砂ですよ。その中でサッカーのゴールポストか何かを重たいからみんなであつさえつさと運んでいるのが面白い。

高柳 視点のフレームが大きく構えられている。そういう視点を見せる口ぶりですよな。

その他の作品たちについて

山田 藤子さんの推薦作品についてうかがいます。「チャウチャウ」。身体性が面白い作品群でしたが。どの句が面白かったですか？

高柳

消印が切手を避けて秋に入る

これは、ごく自然にこの季節感に納得して採りました。「秋に入る」が別の世界にシフトするみたいで。

遠そうな電話番号しゃぼんだま

これも面白かった。

澤 あ、これは私も○をつけている。

高柳 電話番号には、いかにも遠い土地のだなと思わせるものがありますね。一方、「しゃぼんだま」は、そう遠くまで

飛ばないものだから、自分の意識が届かない距離感や淡さを表してて、電話番号の00などの形状もなんだかうまく重なり、素直に面白い味わいの句でした。でもこの人の本領はここではなくて、この人の一番やりたいことはここには出てないのかもしれない。

初空にパンタグラフは石津式
こういうのも好きなんです。石津式ってパンタグラフの種類なんですけど。調べたんですよ。

山田 調べたんですか？

高柳 全員を一人一時間以上かけて読んで、知らない言葉は全部調べました。パンタグラフの石津式というのは設計が良

いらしく、初期のころから使われ、今なお使われているんだそうです。人の知らない専門用語の使用はあんまり良いと思わないけれど、この句は「石津式」という頑固な語感が効いている。それから

ミコにあえかに飛んで梅林

梅と電波。梅といったら香りでしたね。

山田 「夜の梅」という趣向があるように、視覚情報もさることながら五感では嗅覚によるものが歴史的によく出現しますよね。

高柳 ですよ。歴史的にも、匂いは桜じゃなくて梅だし。その匂いを電波にしてみたところがワンポイントというところでした。

山田 「螺旋から」についてはいかがですか？

高柳 立脚する地盤が新しい気がしました。寂しいよ孤独だよと自分の思いを放出する作品が多いなかで、この人ののはちよつとちがうように思います。

みぢんこのなかのつめたい機械かな

これなんかは、環境が寒いんじゃないかって、存在としての冷たさを表している。そうした感覚は一年中だから、今までの季語では表現しにくいんじゃないかな。

澤 落子さんがいいと思う句は私はたいてい採ってるなあ。

高柳 あとね、

さかさまに握ると寒い足だった

これも不思議な句。相手の冷たさを感じとっている。孤独感の表現は不定愁訴になりがちで、読者は医者じゃないよと言いたくなるのですが、この句は、他者の内なる「寒さ」を感じ取っている。他者のぬくもりでなく「寒さ」が通った一瞬です。「さかさまに握る」は、身内じゃない他人が仕事で死んだ人の足を持って運ぶ場面みたい。昔なら戦場など。現代ならホームレスや独居老人の孤独死など。直接そうは書いてないけど、そういう死者の「寒さ」に通うものを自分も持つていて一瞬共有したかのような表現だとも思います。でもイチオシにしないのは、やるならもっとやればと思うからです。上手下手は既存の評価基準の内側の話で、練習すればフツーにうまくなるだけ。評価できない領域でどどん言つてのけてこそだと私は思う。それに、この人は、ちよつとネタ不足なのかも。似てる発想のものが幾つかあるみたい。要するに励ましたい人なんです。この作者は。

山田

シャワー浴び僕ならうつくしい髑髏このテイストが揃っていたら私は激賞したかもしれない。個人的な趣味ですけど。脚とどん短くなつて灼ける父

こういう句が入っていて、面白みを感じることができずに推薦することをほばかりました。

高柳 どうしてダメなんですか？

山田 句としてよくわからないから。

「脚とどん短くなつて」の「て」がよくない。

高柳 父が燃えていて脚が短くなるんじゃないですか？

山田 「て」という接続はそういう順序を誘導しない。

高柳 そうかな。散文と違うからそういうこともなくて、燃えて脚が短くなつていくと取ることはできませんか？

山田 そういう解釈はしませんでした。仮に燃えているのだとしても、脚だけが短くなるわけじゃないだろうし。

高柳 この人は、脚が燃えて短くなつていくことに注目したんだと思いますよ。

澤 この「灼ける」という文字は、燃える方向じゃなくて、日灼けとかの意味

で取るもんなんじゃないの？ または地面が日に照らされて熱をもっているというような、ね。父が焼けるという意味で解釈していいものなのかね。

高柳 体が燃えてるんだつたら死んじゃうけど、死生観が違う。生きてても死んでる、つてやつです。ですから表現上は日に灼けてどんどん脚が短くなるのは有りです。概念の「父」はそういうふうに変化するでしょう。日灼けは身体の死に直結しないけれど、父がずっと生きてピンピンしていても、危機的状況にあることの喩になり得るわけですよ。

澤 ひとり死んでな元気、つてなところか。

山田 吉岡実「僧侶」ですか？

賞を決める

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

賞を決める

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

山田 さて、ここで取りまとめさせていただきますでしょうか。

澤 攝津幸彦賞に批判的なのにそれはどうかと思うなあ。いいじゃないか「山田耕司推薦」とかそういうふうにするれば。

澤 攝津幸彦賞に批判的なのにそれはどうかと思うなあ。いいじゃないか「山田耕司推薦」とかそういうふうにするれば。

澤 攝津幸彦賞に批判的なのにそれはどうかと思うなあ。いいじゃないか「山田耕司推薦」とかそういうふうにするれば。

澤 攝津幸彦賞に批判的なのにそれはどうかと思うなあ。いいじゃないか「山田耕司推薦」とかそういうふうにするれば。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。

澤 自分で選んでいてこの人を絶対に推そうという気がしなかったわけ。たとえばそれぞれ山田くんも高柳さんも異なる感覚なわけだし、そこでなおかつ小異を超えて大同につくというような作品がどんとあればね、わりと点は集中するところか。